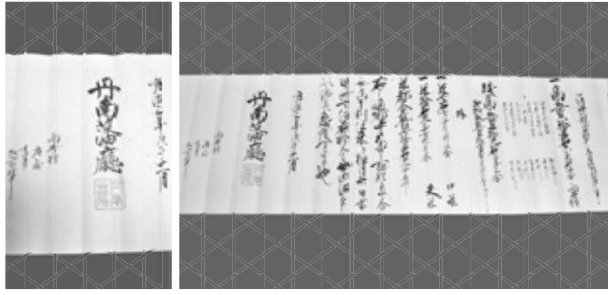


## 丹南藩の公印「丹南藩」木印の発見

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲林五郎家に伝存した陣笠・槍・弓



▲「丹南藩」の押印 明治3年11月。丹南藩庁から向井村庄屋・年寄・惣百姓宛て書状。



▲「丹南藩」木印(38×38×60ミリ)「丹南藩」と陽刻される。



▲林五郎(1829-1908)肖像画。

安政三年、老原村から丹南村へ林五郎家に残る明治三年の押印

本年、二〇二三年は丹南藩ができて四〇〇年になります。徳川氏の直臣である三河国(愛知県)出身の高木正次が、大坂夏の陣の武功によって、元和九年(一六三三)十二月九日、丹南に所領一万石を得て立藩したものです。藩の陣屋(役所)は、現在の丹南三丁目の来迎寺の東側につくられました。

以後、高木氏は大名として江戸時代を通じて一度の転封もなく、明治四年(一八七二)七月の廃藩置県まで二五〇年近く、十二代にわたって藩政をひいたのでした(「歴史ウォーク」61〜65)。

ただ、藩主高木氏は江戸時代中期ごろから丹南と江戸を一年ごとに往復する参勤交代の義務を免ぜられ、江戸定住の定府大名となったことから、行政は江戸で行なわれました。丹南では、代官職以下の藩士が陣屋近辺に居住し、江戸表の指示を丹南など領地の村々に発したのです。中野街道が西方の丹南天満宮に向かう旧陣屋表道筋(北筋)角に林さん宅が建っています(丹南三丁目)。藩政時代には、道を挟んで陣屋の南東側に接しており、西北には丹南村の庄屋である松川家の屋敷が広がっていました。

さて、林家は、もともと河内国志紀郡老原村(現八尾市)の出身でした。老原村は丹南藩の領地で、林氏は高木氏に仕える郷士でした。安政三年(一八五六)、当時の家長、林仁兵衛の長男であった五郎が老原を離れ、現住地の丹南村へ移ってきました。五郎は文政十二年(一八一九)六月五日生まれ。五郎二十七歳の時です。この時期の丹南藩主は、十二代の高木正坦でした。正坦は五郎と同じく、文政十二年三月生まれで、嘉永元年(一八四八)八月、二十歳で十一代正明を継いでいました。

五郎の肖像画が林さん宅に所蔵されています。林家の家紋である「九枚笹」を左右に付けた紋付羽織姿です。同氏宅には、五郎によって伝えられてきた陣笠や弓・槍も残されています。陣笠には「林」姓をデフォルメして、赤字で大きく所有者を表現しています。五郎は明治二十九年(一八九六)三月、六十七歳で長男亀松に家督を譲り、明治四十一年(一九〇八)十二月、七十九歳で生涯を閉じたのでした。

一方、これらの所蔵品とは別に、分家にあたる丹南四丁目の林さん宅には、同様の陣笠と共に、貴重な「丹南藩」の木印も保管されています。先に述べたように、丹南藩は元和九年から明治四年まで存在しますが、藩印が押された文書はほとんど見つかっていませんでした。そういう点からも「丹南藩」木印が旧藩士宅に保管されていたことは、大きな驚きでした。

今から十年前の平成二十五年(二〇一三)、私は林さんから木印を所蔵していることを知らされました。その時、個人的に調査させていただき、文化的価値のある物として大切に保管してくださいとお願ひしました。「丹南藩」と陽刻された三・八センチ×三・八センチ、高さ六センチ角の木製角印です。

ちょうどその折、堺市立みはら歴史博物館の開館十周年記念特別展「美原ものがたり」が同館で行なわれることになりました(平成二十五年十一月二日〜十二月一日)。期間中、私は同館で「丹比から生まれた丹南・丹北・八上郡の歴史」と題して、記念講演を頼まれていました。そこで、この機会をとらえ、私は林さんに「丹南藩」木印を同館の特別展に出品していただけないかとお願いしました。林さんは心よく承諾していただき、多くの人々の目に触れたのでした。

その後、特別展が契機となって、これまで見つかっていなかった「丹南藩」木印を押した書状が発見されました。明治三年(一八七〇)十一月、丹南藩庁が、領地であった河内国丹北郡向井村(現松原市北新町)の庄屋・年寄・惣百姓に宛てた年貢高の割付を記した書状に押されたものです。文末に「明治三年庚午十一月」「丹南藩廳」とあり、「丹南藩」の印が朱で押されています。丹南藩廳は、丹南陣屋に置かれていました。

この書状の九か月後の明治四年七月、これまでの藩を無くし、県を置く廃藩置県が断行されました。丹南藩最晩年の事例であり、まもなく高木氏の領地は丹南県となったのです。

林さん宅に「丹南藩」木印が伝存されていた背景には、幕末時の当主の五郎が丹南藩で木印を管理する立場にあったからかもしれない。本品は、これまであまり実態が知られていなかった丹南藩を考える上で、一級資料となりうるものです。